

銅錢会事変

国枝史郎

青空文庫

女から切り出された別れ話

天明六年のことであつた。老中筆頭はたぬまとのものかみ田沼主殿頭、横暴をき
 わめたものであつた。時世は全くはいたいき廢頹期に属し、下剋上の悪風
 潮が、あらゆる階級を毒していた。賄賂わいろせいたく請託が横行し、物価が
 非常に高かつた。武士も町人もおごり奢侈に耽つた。初はつがつお鰹一尾に一
 両を投じた。上野山下、浅草境内、両国広小路、芝の久保町、こ
 ういう盛り場が繁昌した。吉原、品川、千住こつ、新宿、こういう悪
 所が繁昌した。で悪人がばっこ跋扈した。

その悪人の物語。――

梅が散り桜が咲いた。江戸は紅霞こうかに埋ずもれてしまった。鐘は上野か浅草か。紅霞の中からボンと響く。こんな形容は既に古い。「鐘一つ売れぬ日はなし江戸の春」耽溺詩人其角きかくの句、まだこの方が精彩がある。とまれ江戸は湧き立っていた。人の葬式にさえ立ち騒ぐ、お祭りずきの江戸っ子であった。ましてや花が咲いたのであった。押すな押すなの人出であった。さあ江戸っ子よとんぼ 翻筋斗を切れ！ おっとおっと花道じゃあねえ。往来でだ、真ん中でだ。ワーツ、ワーツという景気であった。

その日情婦おんなから呼び出しが掛かった。若侍は出かけて行つた。いつも決まって媾あいびき曳をする、両国広小路を横へ逸それた、半太

夫茶屋へ足を向けた。

女は先刻から待つていた。

やがて酒肴が運び出され、愉快的な酒宴が始められた。

そうだいいつもならこの酒宴は、非常に愉快的な酒宴なのであつた。この日に限つて愉快でなかつた。女の様子が変だからであつた。ろくろく物さえいわなかつた。下ばかり俯向いていた。そうして時々溜息をした。

「おかしいなあ、どうしたんだらう？」若侍は氣に掛かつた。

と、女が切り出した。別れてくれというのであつた。

これには若侍も面食らつてしまった。で、しばらく黙つていた。

不快な沈黙が拡がつた。

「ふふん、そうか、別れようというのか」こう若侍は洞うつろごえ声で云つた。

「余儀無い訳がございました……」

女の声も洞うつろごえであつた。

また沈黙が拡がつた。

「別れるというなら別れましょう。だが理由わけが解らないではな」

「どうぞ訊かないでくださいませ」女は膝を手で撫でた。

「どうもおれにはわからない。藪から棒の話だからな」若侍は嘲けるようにいつた。相手を嘲けるといふよりも、自分を嘲けるよ
うな声であつた。「では今日が逢しまい終しまいか。ひどくさばさばした
別れだな。いやその方がいいかもしれない。紋切り型で行く時は、

泣いたり笑ったり手を取ったり、そうでなかったらお互いに、愛想吐かしをいい合ったり、色々の道具立てが入るのだが、手数がかかり時間がかかりその上後に未練が残り、恨み合ったり憎んだり、詰まらないことをしなければならぬ。そういうことはおれは嫌いだ。いつそ別れるならこの方がいい。女の方から切り出され、あつさりそれを承知する。アツハツハツ新しいではないか」

決して厭味でいうのではなかった。それは顔色や眼色で知れた。本当にサラリとした心持ちから、そう若侍は言っているのであつた。

「そうと話が決まったら、今日だけは気持ちよく飲ましてくれ」

若侍は盃を出した。女は俯向いて泣いていた。

「おや、どうしたのだ、泣いているではないか。おれは虐め^{いじ}た覚えはない。虐められたのはおれの方だ。虐めたお前が泣くなんて、どう考えても不合理だなあ」まさに唾然とした格好であった。

「ははあ解った、こうなのだろう。あんまりおれが手っ取り早く、別れ話を諾^きいたので、それでお前には飽気^{あつけ}なく、やはり月並の別れのように、互いに泣き合おうというのだろう。だがそいつは少し古い。それもお前が娘なら、うん、初心^{うぶ}の娘なら、そういう別れ方もいいだろう。ところがお前は娘とはいえ、浅草で名高い銀^い杏^{ちよう}茶屋のお色、一枚絵にさえ描かれた女だ。男あしらいには慣れているはずだ。お止しよお止しよそんな古手はな。……おや、やっぱり泣いているね。いよいよ俺には解らなくなつた。ははあ

なるほど、こうなのだろう。あんまり気前よく承知したので、味が悪いとでもいうのだろう。そこでいわゆる化粧泣き、そいつで機嫌を取り結び、後に崇りのないように、首尾よく別れようというのだろう。もしそうならおれは怒る！」

若侍は睨むようにした。

恋敵は田沼主殿頭

「というのは他でもない。おれとお前とは二年越し、馴染なじみを重ねた仲なのに、あんまり心持ちが判らなさ過ぎるからよ」いつてい

る間にも若侍の顔には自嘲の色が浮かんでいた。「アツハツハツハツ違うかな。いや違つたららご勘弁、こいつ器用に謝あやまつてしまふ。とはいえそうでも取らなかつたら、他にとりようはないじゃあないか。二人の間にはこれといつて、氣不味きまづいこともなかつたのに別れ話を切り出され、しかも理由は訊くなという。ちよつと廻り氣も起ころうつてもものさ」

じつと女の様子を見た。女は顔を上げなかつた。耳鬚みみたぶがブルブル顫ふるえていた。色がだんだん紅くなつた。バツチリ噛み切る齒音がした。鬢の垂れ毛を噛み切つたらしい。

若侍は徳利を取つた。自分の盃へ注つごうとした。その手首を握るものがあつた。焰もえるような女の手であつた。

「わたしは買われて行くのです」女は突然ぶつ付けるようにいった。「それをあなたは暢のんき気らしく、笑ってばかりおいでなさる」

「何、買われて行く？ 吉原へか？」

「女郎ならまだしもよござんす。めかけ妾に買われて行くのです」

「うむ、そうして行く先は？」

「はい、あなたの大嫌いな方」

「おれには厭な奴が沢山ある。人間はみんな嫌いだともいえる」

「一人あるではございませんか。とりわけあなたの嫌いな人が」

「なに、一人？ うむ、いかにも。が、それは大物だ」

「そのお方でございます」

「老中筆頭田沼主殿頭！」

「はい、そうなのでございます」

「それをお前は承知したのか？」

「お養母様かあさまが大金を。……」

「うむ、田沼から受け取ったのだな？」

「妾わたしの何んにも知らないうちに。……用人とやらがやって来て。

……」

若侍は立ち上がった。だがまたすぐに坐ってしまった。

「よくある奴だ。珍らしくもない。ふん。金持ちの権勢家、業ごうつ

突張くぼりの水茶屋養母、その犠牲になる若い娘、その娘の情いろおとこ夫

。ちゃんと筋立てが出来てらあ、物語の筋にある奴よ。今まで

は草双紙で読んでいたが、今日身の上にめぐって来たまでさ。泣

くな泣くな何を泣きやあがる」

翌日弓之助は軽装をして、三浦三崎へ出かけて行つた。千五百石の安祥旗本、白旗小左衛門の次男であつて、その時年齢二十三、神道無意流の大先生戸ヶ崎熊太郎の秘蔵弟子で、まだ皆伝にはなつていなかったが、免許はどうに通り越していた。武骨かというに武骨ではなく、柔弱に見えるほどの優やさおとこ男。そうして風流才子であつた。彼は文学が非常に好きで、わけても万葉の和歌を愛した。で今度の三崎行も西行を気取つての歌行脚うたあんぎやであつた。が、これは表おもてむき面おもてで、お色と別れた寂しさを、まぎらそうというのが真相であつた。途中で悠々一泊し、その翌日三崎へ着いた。半

漁半農の三崎の宿は、人情も厚ければ風景もよかつた。小松屋と
いうのへ宿まることにした。海に面した旅籠屋であつた。

「五、六日ご厄介になりますよ」「へえへえ、有難う存じます」

その翌日から弓之助は、懐中硯ふところすずりと綴り紙つづを持って、四辺あたりの

風景を獵あさり廻つた。

銅銭会茶椀陣

しかしよい歌は出来なかつた。別れた女のことばかりが、胸の
うちにこだわつていた。もちろん女と別れたことも、彼には随分

寂しかったが、その女を取った者が、田沼主殿頭だということが、一層彼には心外であつた。というのはほかでもない、彼の父なる小左衛門が、わずか式第の仕し損そいから主殿頭に睨まれて役付いていた鍵奉行から、失脚させられたという事が、数カ月前にあつたからであつた。

「側御用人の小身から、將軍家に胡麻ごまを磨り老中に上がつて七万七千石、それで政治の執り方といえば上をくらし下を搾取、ろくなことは一つもしない。憎い奴だ悪い奴だ」これが彼の心持ちであつた。

「一向三崎も面白くないな。どれそろそろ帰ろうか」
空の吟囊を胸に抱き、弓之助は江戸へ引つ返した。

最初の予定が五、六日、それを二日で切り上げたのであった。

ある日弓之助は屋敷を出た。上野の方へ足を向けた。花の盛りは過ぎていたが、上野山下は景氣立っていた。茶屋女が美しいので、近ごろ評判の一葉茶屋はで、弓之助は喉を濡らすことにした。

女が渋茶を持って来た。ふと見ると弓之助の正面に、一人の老武士が腰かけていた。雪白の髪を総髪むげんに結んだ、無髯童顔の威厳のある顔が、まず弓之助の眼を惹いた。左の眉毛の眉尻に、豌豆ほどの黒子ほくろがあった。

「はてな？」と弓之助は呟いた。武士の眼使いが変だからであった。顔を正面に向けながら、瞳だけをそつと眼角へ送り、じつと

何かを見ているのであった。他人に気取られずに物を見る。——
こういう見方で見ているのであった。「これはおかしい」と思いながら、老人の瞳の向いている方へ、弓之助はこつそり眼をやつた。そつちに小座敷が出来ていた。そこに二人の町人がいた。その一人のやつている事が、弓之助の心をちよつとそそつた。茶飲み茶碗と土瓶とで、変な芸当をしているのであった。茶碗の数は十個あった。しかし土瓶は一個しかなかった。その十個の茶飲み茶碗を、ある時はズラリと一列に並べある時はタラタラと二列に並べ、または方形にまたは弧形に、そうかと思うと向かい合わせたりした。そのつど土瓶の位置が変わつた。非常に手早くやるのであった。いったい何をしているのだらう？　そうやって遊んで

いるのだろうか？ 座敷の隅で、チビチビ酒を飲んでいた。見て
いるような見ていないような、不得要領な眼使いを一人の町人は
して、茶碗の変化へ眼を付けていた。二人は懇意の仲とも見え、
また全くの他人とも見えた。そういう不思議な茶碗の芸当が、し
ばらくの間繰り返された後、二人の町人は茶屋を出た。ややあつ
て老武士が編笠を冠かぶった。

「銅銭会の茶碗陣」こう老武士は呟くようにいった。それから茶
屋を出て行った。

「銅銭会の茶碗陣」老人の言葉をなぞって見たが、弓之助には意
味がわからなかった。しかし何んとなく心に掛かった。意味を確
かめて見たかった。そこで老武士の後を追った。

もうそれは夕暮れであつた。花見帰りの人々が、ふぎけながら往来を練つていた。老武士はズンズン歩いていった。足は谷中へ向いていた。この時代の谷中辺はただ一面の田畑であつた。飛び飛びに藁葺わらぶきの百姓家があつた。ぼんやり春の月が出た。と一軒の屋敷があつた。大名方の控え屋敷と見え、数寄すきの中にも厳めしい構え、黒板塀がめぐらしてあつた。裏門の潜戸くぐりがギーと開いた。老武士の姿が吸いこまれた。

「いったい誰の屋敷だろう？」ここまで尾行つけて来た弓之助は、しばらく佇んで眺めやった。少し離れて百姓家があつた。そこで弓之助は訊いて見た。

「大岡様のお屋敷でございますよ」

「ああそうか、大岡様のな」

弓之助は礼をいって足を返した。

「享保年間の名奉行、大岡越前守と来たひには、とても素晴らしい人傑だったが、子孫にはろくな物はないようだ。今の時代は大岡様がいたら、もつと市中は平和だろうに。……ナーニ案外駄目かもしれない。名君でなければ名臣を、活用することは出来ないからな。……それはそうと今の老人、大岡家のどういう人だろう？ 非常な老年と思われるが、歩き方など若者のようだ。家老や用人ではないらしい。途方もなく威厳があつたからな」

北町奉行曲淵甲斐守

彼の屋敷は本所にあつた。

「お帰り遊ばせ」と若党がいった。

「ああ」と受けて部屋へはいった。小間使いが茶を淹いれて持つて来た。

「お父様は？」と弓之助は訊いた。

「はい、ご書見でございます」

「お兄様は？」と彼は訊いた。

「はい、ご書見でございます」

「みんな勉強しているのだな。何んのために勉強するのだろうか？

論語を読んでどうなるんだろう？ どこかの世界で役立つかし

ら？ どうもおれには疑問だよ。そんな事より行儀でも習って、

頭の下げつ振りでも覚えるんだね。そうでなかったらほうかん幫間でも

呼んで、ついでしようじゆつ追従術を習うんだね。こいつの方がすぐ役立たあ。

お菊お前は どう思うな？」

「若旦那様何をおつしやるやら、ホツホツホツホツ、そんな事」

小間使いのお菊は無意味に笑った。

「ホツホツホツホツそんな事か？ なるほど、こいつも処世術だ。

語尾をほか暈してごまか胡麻化してしまう。偉いぞお菊、その呼吸だ。御みだい

どころ台所に成れるかもしれねえ。俺はお前の弟子になろう、ひとつ

俺を仕込んでくれ」

「厭でございますよ、若旦那様」小間使いのお菊は逃げてしまつた。

弓之助は寝ることにした。

「どぎつた事はないものかしら？ ひっくり返るような大事件がよ。俺はそいつへ食い下がってゆきたい。何んだか知らねえがおれの心には変てこな塊かたまりが出来ている。ともかくもこいつを吐き出したいものだ。つまり溜飲を下げるのさ」

北町奉行 曲淵まがりぶち甲斐守かひのかみ、列代町奉行のその中うちでは、一流の中うちへ数えられる人物、弓之助にとっては叔父であつた。

その翌日のことであつた、弓之助は叔父を訪問した。屋敷内が

騒がしかつた。与力が右往左往した。同心どもが出入りした。重大な事件でも起こつたらしい。弓之助は叔母の部屋へ行つた。

「叔母様、何か取り込みで？」

「おやこれは弓之助さんかい。何んだか妾わたしには解らないが、大変なことが起こつたようだよ」

弓之助には母がなかつた。五年ほど前に逝なくなつてしまつた。で、弓之助はこの叔母を、母のように、懐しんでいた。

「お茶でも淹いれよう、遊んでおいで。叔父さんも歸つて来ようからね」

「ええ有難うございます」

お茶を飲んで世間話をした。叔父は歸つて来なかつた。御殿へ

詰め切りだということであった。夜になってようやく帰って来た。その顔色は蒼褪めていた。弓之助は叔父の部屋へ行つた。

「毎日ご苦労に存じます」

「おお弓之助か、近ごろどうだ」こうはいつたがいつものように、優しく扱かつてはくれなかつた。いわゆる心ここにあらず、何か全く別のことを、考えているような様子であつた。

「これは大事件に相違ない」弓之助は直覺した。「何か大事件でも起こりましたので」顔色を見い見い訊いて見た。

「うん」と甲斐守は物憂そうにいった。「前古未曾有の大事件だ」「いったいどんなことでございますな？」

「絶対秘密だ。いうことは出来ない」甲斐守は苦り切つた。

変な噂は聞かなかつたかな？

甲斐守は深沈大度、喜怒容易に色に出さぬ、代表的の役人であつた。今度に限つてその甲斐守が、まざまざ憂色を面おもてに現わし、前古未曾有の大事件で、絶対秘密というからには、よほどの事件に相違ない。弓之助の好奇心は膨れ上がった。しかし甲斐守の性質として、一旦いわぬといつたからには、金輪際こんりんざい口を開かぬものと、諦めなければならなかつた。そこで弓之助は一礼し、甲斐守の部屋を出ようとした。

「これ弓之助ちよつと待て、少し聞きたいことがある」甲斐守は急に止めた。

「はい、ご用でございますか」弓之助は座に直つた。

「お前は随分道楽者で、盛り場や悪所を歩き廻るそうだな」

「おやおや何んだ、面白くもない。紋切り形の意見かい」弓之助は苦笑したが、

「これはどうも恐れ入ります。はい、さようでございますな。いくらかは道楽も致しますが、決して親や兄弟へは、迷惑などは掛けないつもりで」

「いやいや意見をするのではない。若いうちは遊ぶもよからう。親父のようにかたくなでは、ろくな出世は出来ないからな。どう

だ情婦おんなでも出来ているか」

「おやおやこいつは変へんてこ梃だぞ。妙な風向きになったものだ。叔父貴としては珍らしい。ははあわかった、手段だな。いわせて置いてとつちめる。ううんこいつに相違ない。町奉行なんか叔父に持つと、油断も隙も出来やあしない。甥に對してさえお白洲式の訊問法を採るのだからな。構うものか、逆さかねじ捻を食わせろ」そこで弓之助はニヤニヤした。

「実はね、叔父さん、出来ましたので。茶汲み女ではありませんが、どうしてどうして一枚絵にさえ出た、素晴らしい別嬪でございますよ。だがね、叔父さん、つい最近、縁を切られてしまいました」「切られたというのは変ではないか、お前が縁を切ったんだろう。

冗むだなことをしたものだ」

「いいえそうじゃありません。女から引いんどう導を渡されたんで」

「ほほうそうか、それは偉い」

「偉い女でございますよ」

「いやいや偉いのはお前の方だ」

「叔父さん冷ひやかしちやあいけません」

「冷かすものか、本当のことだ。遊びもそこまで行かなければ、堂に入ったとはいわれない」

「振られて帰る果報者。叔父さん、こいつをいつているんですね」

「いやいやそれとは意味が異う。男へ引導を渡すような女だ、いずれ鉄火に相違あるまい。そういう女をとにかくも、占めたとい

うことは偉いではないか」

「これはどうも恐れ入りました」弓之助は変に気味悪くなった。

「この叔父貴変挺だぜ。金仏のような風采でいてそれで消息には通じている。ははあ昔は遊んだな」

その時甲斐守は一膝進めた。

「そこでお前に訊くことがある。盛り場ないし悪所などで近ごろ何か変わった噂を耳にしたことはなかったかな？」

「さあ、変わった噂というと？」

「銅銭会というようなことを」

「あつ、それなら聞きました。いや現在見たんです」

「ふうむ、そうか、知っているのか。……ひとつずつを話して

くれ」ピタリと甲斐守は坐り直した。

そこで弓之助は昨日、上野山下一葉茶屋で、怪しい振る舞いをした町人のことと、老武士のこととを物語った。じつと聞いていた甲斐守は、一つ大きく頷いた。

「いやよいことを教えてくれた。ついては弓之助頼みがある。これから大至急谷中へ行き、大岡侯の下屋敷へ伺候し、その老体と面会し、もっと詳しく銅銭会のことを、聞き出して来てはくれまいかな」

「はい、よろしゅうございます。しかしはたしてその老人、会って話してくれましようか」

「俺から書面をつけることにしよう」

「へえ、それでは叔父様は、その老人をご存知で？」こう弓之助は不思議そうに訊いた。

銅銭会縁起録

「さよう」といったが曖昧であつた。

「まず知っていると置いて置こう。あの老人は人物だ。徳川家の忠臣だ。しかし一面囚めしゆうど人なのだ。同時に徳川家の客分でもある。捨扶持すてぶち五千石をくれているはずだ。まずこのくらいにして置こう。書面が出来た。すぐ行つてくれ」

「はい、よろしゅうございます」

書面の面には京師殿と、ただ三文字書かれてあつた。

書面を持って飛び出した。ポンと備え付けの駕籠に乗った。

「急いでやれ！ 行く先は谷中！」

深夜ゆえに掛け声はない。駕籠は一散に宙を飛んだ。やがて大

岡家の表門へ着いた。

トントントンと門を叩いた。「ご門番衆、ご門番衆」
四方を憚あたりはばか

つて小声で呼んだ。

「かかる深夜に何用でござる」門の内から声が出た。

「まがりぶちかいのかみ曲淵甲斐守の使者でござる。ただし、私用、くぐり潜戸を開けら

れい」

で、潜戸がギーと開いた。それを潜つて玄関へかかった。

「頼む。頼む」と二声呼んだ。

と、小間使いが現われた。

「これを」と書面を差し出した。

一旦小間使いは引つ込んだが、再び現われると慇懃いんぎんにいった。

「さ、お通り遊ばしませ」

十畳の部屋へ通された。間もなく現われたのは老人であった。

「白旗しらはたうじ氏のご子息だそうで、弓之助殿と仰せられるかな。……

書面の趣き承知致した。しかし談話はなしでは意を尽くさぬ。書物があ
るによつてお持ちなされ」

懐中から写本を取り出した。

「愚老、研究、書き止め置いたもの、甲斐守殿へお見せくだされ。……さて次に弓之助殿、昨日は一葉茶屋で会いましたな」

「ご老人、それではご存知で？」

「さて、あの時の茶碗陣、この意味だけは本にはない。よつて貴殿にお話し致す。——貴人横奪、槐門周章。丙より壬、一所集合、牙城を屠る。急々如律令。——つまりこういう意

味でござった。甲斐守殿へお伝えくだされ」

「して、茶碗陣とおっしゃるは？」

「うむ、茶碗陣か、それはこうだ。銅銭会の会員が、茶碗と土瓶の位置の変化で、互いの意思を伝える法」

「火急の場合、これでご免」

「謹慎の身の上、お見送り致さぬ」

で弓之助は下屋敷を辞した。門を潜ると駕籠へ乗った。

駕籠は一散に宙を飛んだ。

間もなく甲斐守の屋敷へ着いた。門を潜り、玄関を抜け、叔父の部屋へ走り込んだ。

依然肩かたぎぬ衣を着けたまま、甲斐守は坐っていた。

「おお弓之助か、どうであつた？」

「まずこれを」と書物かきものを出した。

「うむ、銅銭会縁起録」

「他に伝ことづつて言でございます」

「うむ、そうか、どんなことだ？」

「先ほど、私お話し致しました、上野山下一葉茶屋で、一人の町人の行なつた茶椀芸についてでございますが、あれは銅銭会の茶椀陣と申し、茶椀の変化によりまして、会員同士互いの意思を、伝え合うところの方法だそうで、あの時の茶椀陣の意味はといえ、貴人横奪、槐門周章。丙ひのえより壬みずのえ、一所集合、牙城を屠る。急々如律令。……かような由にございます」

「ううむそうか、よく解つた」甲斐守はじつと考え込んだ。「……貴人横奪？ 貴人横奪？ これはこの通りだ間違いない。いかにも貴人が横奪された。槐門周章？ 槐門周章？ 槐門というのは宰相の別名、当今の宰相は田沼殿、いかにもさよう田沼殿は、非常に周章あわてておいでになる。だからこれにも間違いはない。丙

より壬？ 丙より壬？ これがちよつと解らない」甲斐守は眼を閉じた。すると弓之助が何気なくいった。

「日柄のことではございませぬかな。たしか一昨日おとついでが丙の日で」

將軍家治誘拐さる

「おつ、なるほど、そうかもしれない。うむ、よいことを教えてくれた。いかにもこれは日柄のことだ丙から壬というからには、丙から数えて壬の日まで、すなわち七日間という意味だ。一所集合？ 一所集合？ これは読んで字のごとく某所へ集まれという

ことだろうか？ 牙城を屠る？ 牙城を屠る？ 敵の本陣をつくという意味だ。急々如律令は添え言葉、たいして意味はないらしい……さてこれで字義は解った。貴人を横取りしたために、宰相田沼殿が周章あわでている。七日の間に某所へ集まり、敵の本陣を突くという意味だ」

甲斐守は沈吟した。

「解ったようで解らない。だがともかくも今度の事件が、銅銭会という秘密結社の、会員どもの所業しわざであることは、どっちみち疑がいはなさそうだ」

「叔父様」と弓之助は窺うように、「貴人とおっしゃるのはどなたのことですか？」

甲斐守はジロリと見た。

「これはな、天下の一大事だ。本来ならば話すことは出来ぬ。これが世間へ知れようものなら、忽ち謀叛が起ころだらう。が、お前には功がある。特別をもって話して聞かせる。貴人というのは將軍家のことだ」

「えっ！」と弓之助は眼を睜みはつた。「それでは上様が何者かに？」
「一昨日の晩、盗み取られた」

「へえ」といったが弓之助は二の句を継ぐことが出来なかつた。

時の將軍家は家治いはえるであつた。九代將軍家重の長子で、この事件の起こつた時には、その年齢五十歳、普通の日本の歴史からい

えば、暗愚の将となつてゐる。しかしそうばかりでもなかつたらしい。ただ余りに女性的で権臣を取つて抑えることが出来ず、権臣のいうままになつていたらしい。少しも下情かじように通じなかつた。権臣がそれを遮さへぎるからであつた。で彼は日本の国は、泰平のものと思つてゐた。彼は性、画を好んだ。そこで権臣は絵師を進め、彼をしてそれにばかり没頭せしめた。

しかるに最近事件が起こつた。近習山村彦太郎が、三河風土記を講読した。すると家治は慨嘆した。「俺は今までこんないい本が、世間にあるとは思わなかつた。もつと彦太郎読んでくれ」そこで彦太郎は陸続りくぞくと読んだ。それを怒つたのが権臣であつた。すなわち田沼主殿頭であつた。すぐ彦太郎を退けてしまつた。

しかし將軍家はそれ以来大分心が変わったらしい。やや田沼を疎むうとようになっていた。そうして下情に通じようとした。田沼はそれを遮ろうとした。しかし將軍は子供ではなかった。一旦覺えた智恵の味を忘れることは出来なかつた。で將軍家と田沼との間が、どうも円滑に行かなくなつた。五日ほど以前まえのことであつた。田沼は將軍家をそそのかし、上野へ微行で花見に行つた、その歸り路のことであつた。本郷の通りへ差しかかつた。忽ち小柄が飛んで来た。が、幸い駕籠へ中あたつた。小柄には毒が塗つてあつた。そうして柄には彫刻ほりがあつた。銅銭会と彫られてあつた。

こうして一昨日の夜となつた。その夜將軍家は近習も連れず、一人後苑こうえんを彷徨さまよつていた。と、一人の非常な美人が、突然前へ

現われた。見たことのない美人であつた。大奥の女でないことは、その女の風俗で知れた。町娘風の振り袖姿、髪は島田に取り上げていた。

女は先に立つて歩いて行つた。將軍家は後を追つた。近習の一人がそれを見付け、すぐ後を追つかけた。御天主台と大奥との間、そこまで行くと二人の姿が——すなわち將軍家と女とが、掻き消すように消えてしまつた、爾来消息がないのであつた。

弓之助感慨に耽る

甲斐守はこう語った。

弓之助は奇異の思いがした。

「これは陰謀でございませぬ。狐狸の所業しわざではありませぬ。怪しいのはその女で、何者かの傀儡かいらいではございませぬか？」

「うん俺もそう思う。振り袖姿のその女は、銅銭会の会員だろう」「申すまでもありません。しかし私は銅銭会より、銅銭会をあやつつてゐるある大きな人物が……」

「これ」と甲斐守は手で抑えた。「お前、田沼殿を疑がつてゐるね」

「勢いそうなるではございませぬか」

「が、ここに不思議なことには、今度の事件では田沼殿は、心の

底から周章あわてていられる」

「さては芝居がお上手と見える」

「いやおれの奉行眼から見ても、殿の周章あわて方は本物だ。そこがおれには腑に落ちないのだ。……さて、よい物が手に入った。銅銭会縁起録、早速これから御殿へまいり、老中方にお眼に掛けよう」

叔父の家を出た弓之助は、寂然しんと更けた深夜の江戸を屋敷の方へ帰って行った。考えざるを得なかつた。

「田沼の所業に相違ない。將軍家に疎うとんぜられた。そこで將軍家をおびき出し、幽囚ゆうしたか殺したか、どうかしたに相違ない。悪い奴だ、不忠者め！ その上俺の情婦おんなを取り、うまいことをしや

がった。

おおやけあだ

公の讐、私の敵、あだどうかしてとつちめてやりたいものだ。だが、

どうにも証拠がない。是非とも証拠を握らなければならぬ。銅銭会とは何物だろうか？ 支那の結社だということだが、どういう性質の結社だろうか？ だがそいつは縁起録を見たら、容易に知ることが出来るかもしれない。明日もう一度叔父貴を訪ね、縁起録の内容を知らせて貰おう。とまれ田沼めと銅銭会とは、関係があるに相違ない。あるともあるとも大ありだ。銅銭会員を利用して、將軍家誘殺を試みたのだ。無理に將軍家を花見に誘い、毒塗り小柄で討ち取ろうとした。ところがそいつが失敗しくじったので、会員中の美人を利用し、大奥の庭へ入りこませ好色の將軍家を誘い出し

たのだ。容易なことでは大奥などへは、地下じげの女ははいれないが、そこは田沼がついている。忍び込ませたに相違ない。だがしかし不思議だなあ。突然消えたというのだから」

彼はブラブラ歩いて行つた。

「田沼にいかにか権勢があつても、深夜城門を開くことは、どんなことがあつても出来るものではない。だが城門を開かなかつたら、城から外へ出ることは出来ない。それだのに突然消えたという。どうもこいつがわからないなあ」

弓之助には不思議であつた。

「もしかすると將軍家には、千代田城内のどの部屋かに、隠されているのではあるまいかな？ お城には部屋が沢山ある。秘密の

部屋だつてあるだろう。どこかに隠されてはいないかな？」

神田を過ぎて下谷へ出た。朧おぼろつき月が空にかかつていた。四辺あたり

が白絹でも張つたように、微妙な色に暈ぼかされていた。

「山村彦太郎が將軍家へ、風土記を講読したというが、結講な試みをしたものだ。そのため將軍家の眩まされた眼が、少しでも明いたということは、非常な成功といわなければならない。もつとも今度の大事件の、そもその発端というものは、その三河風土記の講読にあることは争われないが、決してそれを責めることは出来ない、聞けば山村彦太郎は、賢人松平越中守様に、私淑しているということだが、ひよつとかすると越中守様の、何んとはなしの指金さしがねによりて、そんなことをしたのであるまいかな」

弓之助の社会観

弓之助は上野へ差しかかった。

「越中守はお偉い方だ。ああいう方が廟堂に立ち、政治をとつてくだされたなら、日本の国も救われるのだが、そういう事も出来ないかして、いまだに枢機すうきに列せられない。現代政治のとり方は、こうしんどう庚申堂に建ててある、三猿の石碑いしふみそつくりだ。見ざる聞かざるいわざるだ。將軍家よ見てはいけない。人民どもよ見てはいけない。將軍家よ聞いてはいけない。人民どもよ聞いてはいけない。

將軍家よいつてはいけない。人民どもよいつてはいけない。一口にいえば上をも下をも木でくのぼう偶坊に仕立てようとしているのだがこいつは非常に危険だ。聞かせまいとすれば聞きたがる。いわせまいとすればいいたがる。見せまいとすれば見たがるものだ。圧迫するということは、いつの場合でもよくはない。圧迫、圧迫、さして圧迫！ その次に起こるものは爆発だ。この爆発は恐ろしい。一切の物を破壊しようとする。いつそうそれより処士横議、自由に見させ自由にいわせ、自由に聞かせた方がいいではないか。遙かにその方が安全だ。琉はげ口を作つてやるのだからな。……ところでここはどこだろう？」

そこは浅草馬道であつた。

「お色め、今頃どうしているだろう？　まだ妾めかけにはゆくまいな。ちよつと様子を見たいものだ。別れた、女の様子を見る。未練と人はいうだろう。だが幸い人氣ひとけがない。おりから深夜で月ばかりだ。月に見られたって恥ずかしいものか。しかも春の朧月、被衣かつぎを、冠かぶつておいでなさる」

観音堂の方へ歩いて行つた。昼は賑やかな境内も、人影一つ見えなかつた。家々の戸は閉ざされていた。屋根が水でも浴びたように、銀鼠色に光っていた。巨大な公孫樹いちしようが立っていた。その根もとに茶店があつた。すなわちお色の住居いえであつた。犬が門を守つていた。と尾を振つて走つて来た。よく見慣れている弓之助だからで、懐しそうにじやれつた。「おおよしよし」と頭を撫で

た。「犬の方がよっぽど人間らしい。さて何かやりたいが、小判をやつてもし方がねえ。その他には何んにもないお気の毒だがくれることは出来ねえ。……お色め、今ごろいい気持ちで、グツスリ眠っているだろう。そう思うといい気持ちはしねえ。間もなく田沼の皺くちや爺に、乳房を自由にされるんだろう。こいつは一層いい気持ちやしねえ。だがひよつとするとおれの事を案じて眼覚めているかもしれねえ。こいつはちよつといい気持ちだ。まずなるたけならいい方へ考えた方がよさそうだ。少なくとも気休めにはなるからな」

観音堂の裏手へ廻つた。花川戸の方へ歩いて行つた。どこもかしこも寝静まつていた。家々がまるで廢墟のように見えた。隅田

に添って両国の方へ歩いた。一方は大河一方は家並、その家並が一所切れてこんもりとした森があつた。社やしろでも祀つてあるらしい。「どれ、神様でも拝むとするか」森の中へはいつて行つた。はたして社が祀つてあつた。その拝殿へ腰を掛けた。一つ大きく呼吸いきづいた。もう一度大きく呼吸いきづこうとした。途中で彼は止めてしまつた。

「實際現代は息苦しい。重い石が冠さっている。勇気のある者はいきどおり憤怒をもつて、その重い石を刎ね退けるがいい。勇気のある者は笑つてはいけない！ 肉体的にいう時は、笑つたとたんに筋が弛む。精神的にいう時は、笑つたとたんに心が弛む。弛むということは油断ということだ。その油断に付け込んで飛び込んで来

るのが、妥協性だ。妥協、うやむや、去勢、萎縮、そこで小粋な姿なりをして、天下は泰平でございます。浮世は結構でございます。皆さん愉快にやりましょう。粋おつでげすな。大通でげすな。なあアなんて事になってしまふ。そうやって謳うたっているうちに、それよこせやれよこせ、洗いざらい持って行かれる。ヘツヘツヘツヘツヘツこれはこれは、いつの間に貧乏になつたんだらう？ などと驚いても追つ付かない。だから決して笑つてはいけない。いつもうんと怒っているがいい。……だがこいつは勇士の態度だ。利口者には別の道がある。行儀作法を覚えることよ。お辞儀を上手にすることよ。お太鼓をうまく叩くことよ。お手拍子喝采を習うことよ。それで権勢家に取り入るのよ。そうして重用されるのよ。さ

てそれからジワジワと、自分の考えは権勢家に伝え、その権勢家の力を藉^かりて、もって実行に現わすのよ」

また感慨に耽り出した。

昇ぎ込まれた一丁の駕籠

と、その時一丁の駕籠が、森の中へ担ぎ込まれた。

「こんな深夜にこんな所へ、担ぎ込まれるとは不思議千万、何か様子があるらしい」弓之助は社の背後^{うしろ}へ隠れた。

「おお先棒もうよかろう」「おっと合点、さあ下ろせ」

駕昇きはトンと駕籠を下ろした。それから額の汗を拭いた。それからヒソヒソと囁ささやき合った。

「おい姐ねえさん、用があるんだ、ちよつくら駕籠から出ておくんないせえ」後棒の方がこういった。

「あい」と可愛らしい声が出た。「もう着いたのでございますか」中から垂れが上げられた。「おやここは森の中、駕昇きさん、厭ですなえ。気味が悪いじゃありませんか。どうぞ冗談なさらずに着ける所へ着けておくんなさい」言葉の調子が町娘らしい。

「まあ姐さん、急せきなさんな。着ける所は眼の先だ。がその前にご相談、厭でも諾きいて貰わなけりやあならねえ」こういったのは先棒であった。「おお後棒、もうよかろう。お前からじつくりい

聞かせてやんねえ」両膝を立ててうずくまり、腰の辺りあたを探ったのは、煙管きせるでも取り出そうとするのだろう。

先棒は及び腰をして覗き込んだ。

「のう姐さん、もうおおかた、見当は着いているだろう。いかにも俺おいらは駕昇かじやうきだ。が、問屋場に腰掛けていて、いちいちお客様のお出でを待つて、飛び出すような玉じゃあねえ。もうちつとばかり荒つぽい方だ。俺おいらは石地藏の六といい、仲間は土鼠もぐらの源太といつて、大した悪事もやらねえが、コソコソ泥棒、搔かつ払い、誘拐かどわかしぐらいはやろうつてものさ、さてそこでお前さんだが、品川から駕籠に乗んなすつた時おりから深夜よふけ、女身一人、出歩いこうとは大胆だが情夫おとこにあいたいの一心から、家を抜け出して来た

んだな、こう目星を付けたつてもものさ。で、先棒がいう事には、何も男の所まで、担いで行くにやああたるめえ、大の男が二人まで、ここに揃っているのだからな。なるほど縹きりよう緻は悪かろう、肌だつて荒いに違ちげえねえ。いうまでもなく情夫おとこの方が、やんわりと当るに違えねえ。だがそいつあ勘弁して貰い、厭でもあろうが俺おいら二人を、亭主に持つてはくれまいか、ちよつくら相談ぶつて見ようてな。もつとも厭だといったところでおいそれと、聞く俺らじゃあねえ。よくねえ奴らに魅入られたと、こう思つて器用に往生しねえ」

「おおおお六やどうしたものだ。そう強こわもて面に嚇おどすものじゃねえ。相手は娘だジワジワとやんな」先棒の源太はかがんだまま、駕籠

の中を覗き込んだ。

「ナアー二姐さん心配しなさんな。外見はちよつと恐^{こわ}らしいが、これも案外親切ものでね。お前さんさえ諾^{うん}と云つたらそれこそ二人で可愛がつて、堪能させるのは受け合いだ。が二人とも飽きつぽいんで、さんざつぱら可愛がつたそのあげくには、千住^{こつ}か、品川か、新宿で、稼いで貰わなけりやあならねえかも知れねえ。だがマアそいつは後のことだ。差し詰めここで決めてえのは、素直に俺らの女房になるか、それとも強情に首を振るか、二つに一つだ。返辞をしねえ」

駕籠の中からは返辞がなかった。どうやら顫えてでもいるらしい。と、ようやく声がした。

「まあそれじゃああなた方は、悪いお方でござんしたか」

振り袖姿に島田鬻

「さあね、大して善人じゃあねえ。だがこいつもご時世のためだ。こんな事でもしなかつたら、酒も飲めず、魚も食えず、美婦も自由まにやあ出来ねえつてもものよ。恨むなら田沼様を恨むがいい」

「厭わたしだと妾が首を振つたら？」 「二人で手籠めにするばかりさ」

「もしも妾が声を立てたら？」 「猿さるぐつわ轡わをはめちまう。だがも

し下手にジタバタすると、喉笛に手先がかかるかもしれないねえ。そ

うなつたらお陀仏だ」「それじゃあ妾は殺されるの?」「可哀そうだがその辺だ」「死んじやあ随分つまらないわね」「あたりめえだあ、何をいやがる」

女の声はここで途絶えた。

「それじゃあ妾はどんなことをしても、遁のがれることは出来ないんだね。仕方がないから自由まになろうよ」

「へえ、そうかい、こいつあ偉い。ひどく判りのいい姐ねえさんだ」「だがねえ」と女の声がした。「見ればあなた方はお二人さん、妾の体はただ一つ、二人の亭主を持つなんて、いくら何んでも恥ずかしいよ。どうぞ二人で籤くじでも引いて、勝った方へ、体をまかせようじゃないか」

「なるほどなあ、こいつ無理だ。六ヤイ手前どう思う」

「そうよなあ」と気のない声で「俺^{おい}らがきつと勝つのなら、籤を引いてもよいけれどな」

「そいつあこつちでいうことだ。おいどうする引くか厭か？」

「どうも仕方がねえ引くとしよう。せっかく姐さんのいうことだ。

逆らつちやあ悪かろう」 「よしそれじゃあ松^{まつ}葉^{ばくし}籤だ。長い松葉を引いた方が姐さんの花婿とこう決めよう」

源太は頭上へ手を延ばし、松の枝から葉を抜いた。

「さあ出来た。引いたり引いたり」 「で、どちらが長いんだい？」

「冗談いうな、あたぼうめ、そいつを教えてなるものか。ふふん、そうよなあ、こつちかも知れねえ」 「へん、その手に乗るものか。」

こいつだ、こいつに違えねえ」

六蔵は松葉をヒヨイと抜いた。

「あつ、いけねえ、短けえや！」

「だからよ、いわねえ事じゃねえ、こつちを引けとிட்டんだ」

源太は駕籠へ飛びかかった。「おお姐さん、婿は決まった」駕籠へ腕を差し込んだ。「恥ずかしがるにやあ及ばねえ、ニツコリ笑つて出て来ねえ」

グイと引いた手に連れて、若い娘がヨロヨロと出た。頭上を蔽うた森の木の梢をもち、月が射した。板高く結った島田鬘、それに懸けられた金きんやつこ奴、頸細く肩低く、腰の辺りは煙っていた。べにいろ紅色勝った振り袖が、ぼつたりと地へ垂れそうであった。

「可愛いねえ、お前さんかえ、源さんや。花婿や」キリキリと腕を首へ巻いた。「さあ行こうよ、お宿へね」源太をグイと引き付けた。

「痛え痛え恐ろしい力だ。まあ待つてくれ、呼吸が詰まる」源太は手足をバタバタさせた。

「意気地がないねえ、どうしたんだよ。やわい」は底本では「どうしたんだよ。やわい」じゃあないかえ、お前さんの体は。ホツ、ホツ、ホツ、ホツ、手頼りないねえ」源太の首へ巻いた手を、グーッと胸へ引き寄せた。

「む——」と源太は唸ったが、ビリビリと手足を痙攣させた。と、グンニヤリと首を垂れた。

手を放し、足を上げ、ポンと娘は源太を蹴った。一団の火焰の燃え立ったのは、脛に纏った緋の蹴出しだ。

「化物ばけものだあア！」と叫ぶ声があった。石地蔵の六が叫んだのであった。

息杖を握ると飛び込んで来た。と、娘は入り身になり、六蔵の右腕をひっ掴んだ。と、カラリと息杖が落ちた。「ワ——ツ」と六蔵は悲鳴を上げた。とたんにドンと地響きがあった。六蔵の体が地の上へ潰された墓がまのようにヘタバった。寂然しんと後は静かであった。常夜燈の灯がまばたいた。ギー、ギーと櫓を漕ぐ音が、河の方から聞こえて来た。

怪しの家怪しの人々

クルリと娘は拜殿へ向いた。ポンポンと二つ柏かしわ手を打った。それからしとやかに褻つまを取った。と、境内を出て行った。

社の蔭に身を隠し、様子を見ていた弓之助は、胆を潰さざるを得なかつた。

「素晴らしい女もあるものだ。どういふ素性の女だろう？ ……待てよ、島田に大振り袖！ ……ううむ、何んだか思いあたるなあ。一番後を尾つ行て見よう」

数間を隔てて後を追った。浅草河岸を花川戸の方へ、引つ返さ

ざるを得なかつた。女はズンズン歩いて行つた。月の光を避けるように、家の軒下を伝つて歩いた。遠くで犬が吠えていた。人の子一人通らなかつた。隅田川から灰ほのしろ白い物が、一団ムラムラと飛び上がった。が、すぐ水面へ消えてしまつた。それは鷗かもめの群れらしかつた。女は急に立ち止まつた。そこに一軒の屋敷があつた。グルリと黒塀が取りまいていた。一本の八重桜の老木が、門の内側から塀越しに、往来の方へ差し出していた。満開の花は綿のように白く団々かたと塊まつていた。女は前後を見廻した。つと弓之助は家蔭に隠れた。女は門の潜り戸へ、ピッタリ身体をくっ付けた。それから指先で戸を叩いた。と、中から声が出た。

「おい誰だ。名をなの宣れ」

「俺だよ、俺だよ、勘助だよ」

「うむそうか、女勘助か」

ギ——と潜り戸があけられた。女の姿は吸い込まれた。八重桜の花がポタポタと散った。

弓之助は思わず首を傾げた。かし「何んとかいったつけな、女勘助？ ……では有名な賊ではないか」

その時往來の反対むこうの方から、一つの人影が近付いて来た。月光が肩にこぼれていた。浪士風の大男であつた。大おたぶさ髻むすに黒紋付き、袴無しの着流しであつた。しずしずこつちへ近寄つて来た。例の家の前まで来た。と、潜り戸へ体を寄せた。それから指でトントンと叩いた。

「何人でござるな、お宣なのりくだされ」すぐに中から声がした。

「むらさきひも紫 紐 丹左衛門」

すると潜り戸がギーと開いた。浪士の姿は中へ消えた。同時に潜り戸が閉ざされた。

とまた一つの人影が、ポツツリ月光に浮き出した。博徒風の小男であった。心持ち前へ首を傾げ、足先を見ながら歩いて来た。急に人影は立ち止まった。例の屋敷の門前であった。ツと人影は潜り戸へ寄った。同じことが繰り返された。指先で潜り戸をトンと打った。

「誰だ誰だ、名をいいねえ」

「新助だよ、早く開けろ」

「稲葉の兄貴か、はいりねえ」

潜り戸が開き人影が消え、ふたたび潜り戸がとぎされた。

その後はしばらく静かであった。

またもその時足音がした。足駄と草鞋わらじとの音であった。忽ち二

つの人影が、弓之助の前へ現われた。その一人は旅僧であった。

てっこう手甲きやはん、脚絆あみだがさ、阿弥陀笠、ずんぐりと肥えた大坊主であった。

もう一人の方は六部であった。負おいずる蔓を背中にしよつていた。白

の行衣を纏っていた。一本歯の足駄を穿いていた。弓之助の前を通り過ぎ、例の屋敷の門前まで行った。ちよつと二人は囁き合つた。ツと旅僧が潜り戸へ寄つた。指でトントンと戸を打つた。すぐに中から声が出た。

「かかる深夜に何人でござるな？」

「鼠小僧外伝だよ」

つづいて六部が忍ぶようにいった。

「俺はひばし火柱し夜叉丸やまだ」

例によつて潜り戸が、ギ——と開いた。二人の姿は吸い込まれた。ゴトンと鈍い音がした。どうやらかんぬき門を下ろしたらしい。サラサラサラサラと風が渡った。ポタポタと八重桜の花が落ちた。そのほかには音もなかった。

ガラガラと飛び出した四筋の鎖

闇に佇んだ弓之助は、考え込まざるを得なかった。「女勘助、紫紐丹左衛門、稲葉小僧新助、火柱夜叉丸、それからもう一人鼠小僧外伝、これへ神道徳次郎を入れれば、江戸市中から東海道、京大坂まで名に響いた、いわゆる天明の六人男だ。ううむ偉い者が集まったぞ。ははあそれではこの屋敷は、彼奴らきやつ盗賊の集会所だな。いやよいことを嗅ぎ付けた。叔父へ早速知らせてやろう。一網打尽、根断やしにしてやれ」

スルスルと彼は家蔭を出た。

「いやいや待て待て、考え物だ。これから叔父貴の屋敷へ行き、事情を語っているうちには、夜が明けて朝になる。せつかくの獲

物が逃げようもしれぬ。逃がしてしまつてはもつたない。ちよつとこいつは困つたなあ」彼ははたと当惑した。

「気にかかるのは女勘助だ。島田鬻に大振り袖、美人の装いをしていたが、大奥の後苑へ現われて、上様を誘拐したという、その女も島田鬻、振り袖姿だということである。……関つながり係があるのではあるまいかな？ ……いよいよ此こやつ奴は逃がせねえ。うむそうだ踏み込んでやろう。有名なうての悪わるもの漢であろうとも、たかの知れた盗賊だ。掛かつて来たら切つて捨て、女勘助一人だけでも、是非とも手てどり擒とらにしてやろう」

彼は剣道には自信があつた。それに彼は冒険児であつた。胸に出来ている塊かたまりを、吐き出したいという願ひもあつた。どぎつた事

をやつてみたい。こういう望みも持っていた。

彼は潜り戸へ身を寄せた。それから彼らの真似をして、指でトントンと戸を打った。中は森閑と静かであった。人のいるような氣勢もなかった。彼は扉へ手を掛けた。ヒラリと上へ飛び上がった。腹這いになって窺^{うかが}った。眼の下に小広い前庭^{にわ}があり、植え込みが飛び飛びに出来ていた。その奥の方に主屋があつた。どこにも人影は見えなかつた。で弓之助は飛び下りた。植え込みの蔭へ身を隠し、さらに様子を窺った。やはりさらに人氣^{ひとけ}はなかつた。玄関の方へ寄つて行つた。戸の合わせ目へ耳をあて、家内の様子を窺つた。無住の寺のように寂しかった。試みに片戸を引いてみた。意外にも、スルリと横へ開いた。「これは」と弓之助は吃^{びつく}

驚りした。「いやこれはありそうなことだ。泥棒すみかの巢窟へ泥棒が忍び込む気遣いはないからな、それで用心しないのだろう」彼は中へはいって行つた。玄関の間は六畳らしく燈ともしび火がないので暗かつた。隣室と仕切つた襖があつた。その襖へ体を付けた。それからソロソロと引き開けた。その部屋もやはり暗かつた。十畳あまりの部屋らしかつた。隣室と仕切つた襖があつた。その襖をソロソロと開けた。燈ともしび火がなくて暗かつた。全体が手広い屋敷らしかつた。しかも人影は皆無であつた。どの部屋にも燈火がなかつた。一つの部屋の障子を開けた。そこに一筋の廻廊があつた。その突きあたりに別軒べつむねがあつた。離れ座敷に相違ない。廻廊伝いにそつちへ行つた。雨戸がピツタリ締まっていた。その雨戸を

そつと開けた。灰ほのあか明るい十畳の部屋があつた。隣り部屋から漏れる燈が部屋を明るくしているのであつた。弓之助はその部屋へはいった。隣り部屋の様子を窺つた。やはり誰もいないらしい。思い切つて襖を開けた。はたして人はいなかつた。机が一脚置いてあつた。そうしてその上に紙があつた。紙には文字が記されてあつた。

せんだいていししゆ
川大丁首

こう書いてあつた。

「はてな、どういう意味だろう？」

で、弓之助は首を傾げた。突然ガチャンと音がした。部屋の片隅の柱の中から、鎖が一筋弧を描き弓之助の方へ飛んで来た。右手を上げて打ち払った。キリキリと手首へまきついた。「しまった！」と叫いたそのとたん、反対側の部屋の隅、その柱の中央から、またもや鎖が飛び出して来た。キリキリと左手へまきついた。またもや鎖の音がした。もう一本の柱から、同じように鎖が飛び出して来た。それが弓之助の胸をまいた。ともう一本の柱から、またもや鎖が飛び出して来た。それが弓之助の足をまいた。四筋の鎖にまき縮められ、^{すく}弓之助はバツタリ畳へ仆れた。身動きすることさえ出来なかつた。

だが屋敷内は静かであつた。^{しわぶき}咳一つ聞こえなかつた。行燈^{あんどん}の

燈^ひは光の輪を、天井へボンヤリ投げていた。どうやら風が出たらしい、裏庭で木の揺れる音がした。……いつまで経つても静かであつた。人の出て来る氣勢もなかつた。

「どうもこいつは驚いたなあ」心が静まるに従つて、弓之助の心は自嘲的になつた。「人間を相手に切り合うなら、こんな不覚は取らないのだが、鎖を相手じゃあ仕方がない。……これは何んという戦法だろう？ とにかくうまいことを考えついたものだ。敵ながらも感心感心。……と云つて感心していると、どんな酷^{ひど}い目に合うかもしれない。さてこれからどうしたものだ。どうかして鎖を解きたいものだ」

彼は体を蛇^{うね}らせた。鎖が肉へ食い込んだ。

恋文を書く銀杏茶屋のお色

「痛え痛え、おお痛え。滅多に体は動かせねえ。莫迦にしてい
あ、何んということだ。仕方がねえからおとな穩しくしていよう。……
だがそれにしても泥棒どもは、どこに何をしているのだろうか？
姿を見せないとは皮肉じゃあないか。ひどく薄っ気味が悪いなあ。
これじゃあどうも喧嘩にもならねえ。……考えたって仕方がねえ。
もがくとかえってひどい目を見る。おちついて待つより仕方がね
え、うんそうだ、こんな時には、何かで心を紛らせるがいい。紙

に書かれた『川大丁首』よしこの意味を解いてやろう」そこで彼は考え出した。だがどうにもわからなかつた。「こんな熟字つてあるものじゃねえ。川は川だし大は大き。丁は丁だし首は首だ。音で読めば川大丁首。川大にして丁の首？　こう読んだって始まらねえ。……こいつ恐らく隠語なんだろう」

依然屋敷は静かであつた。

銀杏茶屋のお色は奥の部屋で、袖垣をして恋文ふみを書いていた。まだ春の日は午前であつた。店の客も少なかつた。部屋の中は明るかつた。春陽が丸窓へ射していた。小鳥の影が二三度映つた。彼女は大分ご機嫌であつた。顔の紐が解けていた。頬にこつぽり

した笑えくぼ鑿が出来うっかり指で突こうものなら指先が嵌はまり込んで
抜けそうもなかった。彼女はひどく嬉しいのであった。千代田城
中に大事件が起こり、田沼主殿頭が狼狽し、お色を妾めかけにすること
など、とても出来まいということも——もちろんハッキリといっ
たのではないが、とにかくそういう意味のことを、田沼の家の用
人から、今朝方知らせがあつたからであつたのみならず、養母に
渡したところの、手附けの金は手附け流れ、返すに及ばぬという
ことであつた。で、養母もご機嫌であつた。そこでお色はこの事
情を、恋しい男の弓之助へ告げ、今日いつもの半太夫茶屋で、逢
おうと巧たくんでいたのであつた。

「恋しい恋しい」という文字や「嬉しい嬉しい」という文字も、

目茶目茶に恋文^{ふみ}へ書き込んだ。

「あらあらかしく、お色より、恋しい恋しい弓様へ」こう結んで筆を置いた。封筒へ入れて封じ目をし、さも大事そうに懐^{ふところ}中へ入れた。それから他^{よそゆ}行きの衣裳を着、それから店へ出て行つた。

「ちよつとお母さん出て来てよ」

「さあさあどこへなといらつしやい」長火鉢の前へ片膝を立て、お誂え通りの長煙管、苳^{たばこ}を喫^ふかしていた養母のお兼^{かね}は、黒い齒茎^{かみ}で笑つてみせた。「おやおや大変おめかしだね。ふふん、さてはあの人と……」

「いらざるお世話、よござんすよ」

「観音様へ参詣しお賽銭ぐらいは上げるだろうね」

「おや、そいつは本当だね」

いい捨ててお色は戸外へ出た。ブーツと春風が鬢を吹いた。で彼女は鬢を押さえた。ブーツと春風が裾を吹いた。今度は前を抑えなければならぬ。「風さえ妾わたしなぶを黽なぶつているよ」彼女はそこでニツコリとした。鳩がポツポと啼ないていた。彼女の周囲へ集まつて来た。

「厭だねえこの鳩は、邪魔じやないか歩くのにさ」

御堂の前で掌を合わせた。帯の間から銭入れを抜き、賽銭箱へお宝を投げた。

「どうも有難う、観音様。みんなあなたのご利益よ」

で彼女は歩いて行つた。

「何て今日はいいい日なんだろう。みんな妾わたしに笑いかけているよ。

何だか知らないが有難うよ」

往来の人が囁ささやき合つた。

「あれが評判のお色だよ」「どうでえどうでえ綺麗だなあ」「今日は取りわけ美しいぜ」

「はいはい皆さん有難うよ」彼女は笑つて口の中でいった。

「でもね、皆さんお生憎あいにくさまよ、見せる人はほかにあるんですよ」

逢つてくれない弓之助

走り使いの喜介の家は、二丁目の露路の奥にあった。お色は煤けた格子戸を開けた。

「ちよいと喜介どん、頼まれて頂戴」

菊石面あばたづらの四十男、喜介がヒョイと顔を出した。「へいへいこれはお色さん」

「これをね」とお色は恋文ふみを出した。「いつもの方の所へね。……これが駕籠賃、これが使い賃、これが向こうのお屋敷の、若党さんへの心付け」

「これはこれはいつもながら。……お気の付くことでございます。

……そこで益 ご繁昌」

「冗むだをいわずと早くおいでな」

喜介は門を飛び出した。お色は両国を渡って行つた。「春の海ひねもす終ひねもす日のたりのたり哉かな」……「海」を「河」に置き代えよう。

「春の河終日のたりのたり哉」まさに隅田がそうであつた。おりから水は上げ潮で河幅一杯に満々と、妊婦の腹のように膨れてい
た。荷足、帆船、櫂かいこぶね小船、水の面おもてにちらばつていた。兩岸の家並が水に映り、そこだけ影がついていた。

「いい景色、嬉しいわね」お色は恍惚うっとりと河を見た。「まるでお湯のように見えるじゃあないの」——嬉しい時には何も彼も、水さえ湯のように見えるものであつた。「おや都鳥が浮いているよ。可愛いわねえ、有難うよ」またお色は礼をいった。嬉しい時には

有難く、有難い時には礼をいう。これは大変自然であつた。そこ
 でお色は橋を越した。まだ広小路は午おひるまえ前のことであんまり人
 が出ていなかつた。それがまたお色には嬉しかった。芝居、見世
 物の小屋掛けからは、稽古囃しが聞こえて来た。

横そへ外れると半太夫茶屋で、ヒラリと洩染めの暖簾のれんを潜つた。

「おやお色さん、早々と」女将おかみが驚いて顔を長くした。眉を落と
 した中年ちゅうどし増唇から真つ白い歯を見せた。

「さあお通り。……後からだろうね？」

ヒヨイと母おやゆび指を出して見せた。

「私今日は嬉しいのよ」お色はトンと店へ上がった。

「そうだろうね。嬉しそうだよ」

「うんとご馳走を食べるよ」

「家の肴うちで間に合うかしら」

「そうして今日は三味線をひくわ」

「一の糸でも切るがいいよ。身受けされるっていうじやあないか」

「その身受けが助かったのよ」

いつもの部屋へ通つて行つた。ちんまりと坐つて考え込んだ。

「私あの人を嘗なめ殺してやるわ」

恐ろしいことを考え出した。

「逢い戻り！ いいわねえ」——いいことばかりが考えられた。

「初めてあの人と逢うようだよ」自分で自分の胸を抱いた。ちよ
うどあの人に抱かれたように。「だが何んだか心配だよ」今度は

少し心配になった。「あの人何んておっしゃるだろう」これはちよつと問題であつた。「のつげに私はこういうわ。もういいのよ。済んだのよ。お妾めかけに行かなくつてもいいのだわ」するとあの人おつしやるかも知れない。「お色、大變氣の毒だが、おれには他に情婦おんなが出来たよ」……厭だわねえ、困つちまうわ。彼女は本当に困つたように部屋の中をウロウロ見た。「おやこの部屋は四畳半だわ」毎々通る部屋なのに、彼女は初めて気が附いたらしい。「ああでもない」と四畳半！　いいわねえ。嬉しいわ」嬉しい方へ考えることにした。

「でも随分待たせるわねえ」

まだ十分しか待たないのに。

床に海棠かいどうがいけてあつた。春山の半折はんせつが懸かつていた。残ざ鶯んおうの啼音なきねが聞こえて来た。次の部屋で足音がした。

「いらつしやつたか、やつとのこと」彼女は急いで居住居を直した。だが足音は引つ返した。

「莫迦まがにしているよ。人違いだわ」彼女はだんだん不機嫌ふきげんになつた。

長いこと待たなければならなかつた。女中が茶を淹いれて持つて来た。

でもとうとうやつて来た。弓之助でなくて喜介であつた。

「どうもお色さんいけません。昨日お出かけになつたまま、今日まだお帰りにならないそうで」

喜介の報告はしやうせこうであつた。お色は一時に氣抜けした。じつと首をうな垂れた。

両国橋の乞食の群

女将おかみが声を掛けたのに、ろくろく返事をしようともせず、お色はフラリと茶屋を出た。同じ道を帰つて行つた。

「案じた通りだ、出来たんだわ、ええそうよ、ほかに女が」まず彼女はこう思った。「そういうものだわ。男というものは」別れ話を持ち出したのが、彼女自身だということを、彼女はここで忘

れていた。

「何んだか眼の前が真つ暗になつたわ」両国橋へ差ししかかった。橋の欄干へ身をもたせた。「河なものかまるで溜ためだわ……！」隅田川の風景も、もう彼女には他人であつた。「きつと河は深いんだらうねえ」ゾツとするようなことを考えた。「身を投げたらどうだろう？」死んでからのことが考えられた。「あの人泣いてくれるかしら？」決して泣くまいと決めてしまった。「では随分つまらないわねえ」手頼たよりなくてならなかつた。

「ドボーンと妻わたしが身を投げたら、誰か助けしてくれるかしら。そうよ今は昼だから。助けてくれたその人が、あの方だったらいいのにねえ」

ダラリと袖を欄干へ垂らし、ぼんやり河面かわもを眺めやった。やはり都鳥が浮かんでいた。やはり舟がとおっていた。皆々他人であった。急に眼めがしら頭がむず痒がゆくなつた。眼尻めがしがにわかにに熱を持つて来た。ボツと両の眼が霞んで来た。瞳しやへ紗でも張られたようであった。家々の形がひん曲がつて見えた。見える物がみんな遠く見えた。そうしてみんな「は底本では「そうしてみんな」濡れて見えた。

涙を透して見る時は、すべてそんなように見えるものであった。体の筋でも抜かれたように、グンニヤリとした歩き方で、お色は橋を向こうへ越した。すぐ人波まに渦まき込まれた。

お色の倚よつていた欄干から、二間ほど離れた一ひとところ所に、五、

六人の乞食こじきが集たかつていた。往来の人の袖に縋り、憐愍あわれみを乞やう輩からであつた。

ひとつ一個の手ごろの四角い石と、十個の小さい円石とで、一人の乞食が変なことをしていた。

やや離れた欄干に倚り、それを見ている老武士があつた。編笠で顔を隠しているので何者であるかは解らなかつた。

乞食は角石を右手へ置いた。それから小石を三個だけ、その左手へタラタラと並べた。

老武士が口の中で呟いた。

「銅銭会茶椀陣、その変格の石礫陣せきれきじん。……うむ、今のは争鬪陣

だ」

乞食はバラバラと石を崩した。角石をまたも右手へ置き、その左手へ二つの小石を、少し斜めにピッタリと据えた。それから指で二の字を描いた。

と、老武士は口の中でいった。「そうりゆう雙龍玉を争うの陣だ」

すると塊かたまつていた数人の乞食の、その一人が手を延ばし、ツと一つの小石を取った。それを唇へ持つて行つた。それから以前もとの場所へ置いた。他の乞食が同じことをした。次々に小石を取り上げた。それを唇へ持つて行つた。それから以前まえの場所へ置いた。「茶を喫するといふ意味なのだ」老武士は口の中で呟いた。「雙龍玉を争うにより、その争鬪に加わるよう。よろしいといつて承知した意味だ。ふむ、何かやると見える」

乞食は手早く石を崩した。小石ばかりを三個並べた。その後へ二つ円を描いた。

「ははあ同勢三百人か」口の中で老武士はいった。

乞食はまたも石を崩した。角石を取って右手へ置いた。一個の小石を左手へ置いた。その左手へ四個の小石を、四角形に置き並べた。そうして四角形の石の周囲へ、指で四角の線を引いた。

と、老武士は呟いた。「これ患難相扶陣だ。今度の争闘は患難だによつて、相扶あいたすけよという意味だ」

乞食はまたも石を崩した。それから再び石を並べた。三個の小石を左手に並べ、三個の小石を右手へ並べた。中央へ二個の小石を置いた。

「これすなわち梅花陣だ」

周易の名家加藤左伝次

乞食は左右の手を延ばし、左右六個の石を取った。

「ははあ、花だけ残したな」

急に乞食は二個の小石へ、さらに一個の石を加えた。その左右に三個ずつ六個の小石を置き並べた。

「これはほかならぬ河川陣だ」
かせんじん

乞食はまたもや石を崩した。十個の小石を一列に並べた。その

中央へ角石を置いた。

「これはほかならぬ門陣。戸という文字を暗示したものだ。三つを合わせると花川戸。ははあこれは地名だな」

乞食はまたも石を崩した。小石を五個一列に並べた。そうして指で「刻」の字を書いた。

「うん、これは五更ごこうという意味だ」老武士は口の中で呟いた。

乞食の石芸はこれで終った。人の往来が劇はげしくなった。乞食達は袖へ縋り出した。いつの間にか皆見えなくなった。

老武士は悠然と欄干を離れた。橋の袂に駕籠屋がいた。

「駕籠屋」と老武士はさし招いた。「数寄屋橋すきやばしまでやってくれ。

うむ、行く先は北町奉行所」

すぐに駕籠は走り出した。

お色は俯向いて歩いていった。顔を上げると屋敷があつた。門に看板が上がっていた。地じたいてん泰天けめんの卦面けめんを上部に描き、周易活断、續善堂、加藤左伝次と記されてあつた。

当時易学で名高かつたのは、新井白峨と平沢左内、加藤左伝次は左内の高弟、師に譲らずと称されていた。左内の専門は人相であつたが、左伝次の専門は易断であつた。百発百中と称されていた。

お色は思わず足を止めた。

「あのお方のお心持ち、ちよつと占つて貰おうかしら？」

で門内へはいつていった。すぐ溜り場へ通された。五、六人の人が待つていた。一人一人奥へ呼び込まれた。嬉しそうな顔、悲しそうな顔、いろいろの顔をして戻つて来た。やがてお色の番が来た。お色は奥の部屋へ行つた。部屋の正面に床の間があつた。脇床の違ひ棚に積まれてゐるのは、帙ちつにゆう入いの古書や巻軸であつた。白熊の毛皮が敷いてあつた。その上に端然と坐つてゐるのは、三十四、五の人物であつた。総髪はげの裾すそが両肩の上に、ゆるやかに波を打つてゐた。その顔色は陶器のようで、ひどく冷たくて蒼白かつた。眼の形は鮠はやのようであつた。眼尻まなびが長く切れてゐた。耳みみ鬘みたぶへまで届きそうであつた。その左の目の瞳に近く、ポツツリ星がはいつてゐた。それが変に気味悪かつた。黒塗りの見台が置

いてあつた。算木さんぎ、筮竹ぜいちくが載せてあつた。その人物が左伝次であつた。茶無地の被布を纏つていた。

お色は何がなしにゾツとした。凄気が逼るような気持ちがあつた。遠く離れて膝を突いた。それからうやうやしく辞儀をした。

と、左伝次は頤あごをしやくつた。

「恋だな、お娘あたご中つたらう？」

「えつ」とお色は度胆を抜かれた。

「もつとお進み、見てあげよう」左伝次の声は乾いていた。枯れ葉が風に鳴るようであつた。やはり変に不気味であつた。「年は幾歳いくつだ、男の年は？」

「は、はい、年は二十三で」

「妻はあるかな、その男には？」

「いえ、奥様はございません」

「ナニ、奥様？ うむそうか。相当家柄の侍だな？」

「旗本衆のご次男様で」つい釣り込まれていつてしまった。

「で、何を見るのかな？」

「はい、そのお方のお心持ちが……」赭くなつていい淀んだ。

「変わったか変わらないか見るのであろう？」

「は、はい、さようでございます」

「よし」というと笹竹を握った。「よいか、見る人と見られる人との精神が合盟一致した時、易というものは的中する。で、お前さんも一生懸命におなり」

お色は形を改めた。

「ヤ——ツ」と鋭い掛け声が、左伝次の口から迸り出た。ほとぼし「ヤーツ、ヤーツ、ヤーツ、ヤーツ」ドン底へしみるような声であった。左伝次の額からは汗が流れた。ザラザラザラと笹竹が鳴った。お色は心が恍惚うっとりとなった。これまでも易は見て貰ったが、こんな凄じい立てかたは、一度も経験したことがなかった。「さすがは名題の加藤先生。ああこの易はきつと中る」お色は突嗟に信じてしまった。

左伝次は笹竹を額へあてた。パチパチパチパチ。パチパチパチ。カチカチ。力をこめては刎ね上げた。と、算木へ手を掛けた。カチカチと算木が返された。ホーツと一つ呼吸いきをすると、ザラザラと

筮竹を筒の中へ入れた。それから算木を睨み付けた。

お色は思わず呼吸を呑んだ。

死中ただ一活路

「おお、お娘ご、これはいけなしい」気の毒そうに左伝次はいった。「あのそれではそのお方の、お心持ちが変わったので？」お色はブルブルと顫え出した。

「いや心は変わっていない。……もつと大変なことがある」

「え、そうして大変とは？」

「死地にはいつておられるのだ」

「まあ」と叫ぶとフラフラと立ったが、すぐベツタリと坐つてしまつた。

「では、お命があぶないので？」

「うむ」と左伝次は顔を曇らせ、「しかもそれが冤罪えんざいでな」

「どこにおられるのでございましょう？」

「さあ、そこまでは解らない」左伝次はお色を刺すように見た。

「だがただ一つ道がある。そうだその人を救う道がな」

「どうぞお聞かせくださいまし」お色はズルズルと膝を進めた。

「先生お願いでございます」

「医は肉体やまいの病を癒し、易は精神なほの病を癒す。いわばどっちも仁

術だ。わしの力で出来るだけの事は骨を折ってしてあげよう。その人を救う唯一の道とは、その人と一番親しい人がさらに他の人に正直に事情を話して救いを乞う時、事情を話されたその人が、事件を解決して救うというのだ。易おもての面に現われている。詳しく分解して話してもよいが専門の言葉で説明しても、お前さんには解るまい。ところでその人と親しい人とは、今の場合お前さんだ。さらに他の人とは誰のことか。これはどうやらわらしい。そこでお前さんが正直に今度の事情をわしに話したら、あるいはこのわしがその人を、救い出すことが出来るかも知れない。もちろんたしか確実とはいわれないがな」

「はい有難う存じます。それではお話しいたします。どうぞお聞

きくでございます。あの妾わたしは浅草の、銀杏茶屋のお色でござい
ます」

——それから田沼に懇望され、その妾めかけになろうとしたこと、可
愛い恋人と切れたこと、妾めかけになることが止めになったこと、今日
呼び出しを掛けたところ、恋人が昨日屋敷を出たきり、今に帰つ
て来ないこと——一切合切打ち明けた。

左伝次は黙って聞いていたが、その顔には曖昧な、混乱したも
のが現われた。

「その人の名は何んというな？」やがて左伝次はこう訊いた。

「白旗弓之助様と申します」

「うむ、お旗本で白旗か……。小左衛門殿のご縁辺かな？」

「そのお方のご次男様で」

「では確か北お町奉行、曲淵様とはご親戚のはずだが」

「はい叔父甥の仲だそうで」

左伝次はじつと考え込んだ。「昨日から行方が不明なのだな？」

「はいさようでございます」

ここで左伝次はまた考えた。

「弓之助殿のご様子は？ つまり容貌風采だな」

「色白の細ほそおもて面、中肉ちゆうぜい中身長でございます」

「うむ、そうして腰の物は？」

「あの細身の蠟鞆の大小……」

「うむ、そうしてご定紋は？」

「はい丸に蔦つたの葉で」

すると左伝次はヒヨイと立った。

「お色殿ちよつとこつちへおいで」

障子を開けると縁へ出た。

午後の陽が中庭にあたっていた。

お色は相手の氣勢に引かれ、立ってその後へ従った。

縁は廻廊をなしていた。その外れに離れ座敷があった。不思議なことには、昼だというのに、雨戸がピッタリ閉まっていた。離れ座敷の前までゆくと、左伝次は入り口の戸を開けた。最初の部屋は暗かった。間あいの襖をサラリと開けた。

その部屋には燈とも火しびがあつた。行あんどん燈がボツと点っていた。

途方もねえ目違いさ

一人の武士が四筋の鎖で、がんじがら擲からみに擲からめられていた。畳の上とに転がっていた。それを五人の異形の男女が、真ん中にしてと囿りま繞りまっていた。一人は僧侶一人は六部、一人は遊び人、一人は武士もう一人は振り袖の娘であった。娘は胡坐あぐらを搔かいていた。そうして弓の折れを持っていた。

左伝次とお色の姿を見ると彼らは一斉に顔を上げた。

と、左伝次はお色へいった。

「お色殿、この方かね」搦められた武士を指さした。

ヒョイとその武士が顔を上げた。お色はやにわに、すが縋り付いた。

「弓様！ 弓様！ お色でございます！」ひとしきり部屋の中は静かであった。白旗弓之助はお色を見た。

「お色ではないか、どうして来た」驚いたような声であった。

「神道の兄貴、どうしたんだい？」

ややあつて娘が——女勘助が、変な顔をして声を掛けた。

すると左伝次は苦笑いをした。

「飛んだ人違いだ。偉いことをやった。おいおい早く鎖を解きねえ」

鼠小僧外伝が、ガラガラと鎖を解き放した。と鎖は柱の中へ、

手繰られたように飛び込んで行った。

「おい貴様達、謝まつてしまえ。詳しい話はそれからだ」易学の大家加藤左伝次、本名神道徳次郎はピタリと畳へ端坐した。それから両手を膝の前へ突いた。

「いや、白旗弓之助様、とんだ粗忽そこつを致しました。まずお許しくださいますよう」恐縮し切つて辞儀をした。

「おいおい貴様達このお方はな、お旗本白旗小左衛門様の、ご次男にあたられる弓之助様だ、曲淵様の甥ごだよ」

「へえ」と五人は後へいざつた。

「銅銭会員じゃあなかつたのか？」火柱夜叉丸が眼を丸くした。

「うん、途方もねえ目違いさ」

「だが、それにしてはなんのために、昨夜ここへ忍んだんだらう？」女勘助が疑がわしそうにいった。

「そうだ、そいつがわからねえ」稲葉小僧新助がいった。

「おれはどうでもこのお侍は、銅銭会員だと思いがな」鼠小僧外伝がいった。「そうでなかったら責められないうちにそいつを弁解するはずだが」紫紐丹左衛門は腕を組んだ。

「本当にそうだ、そいつが解らねえ。そいつをハツキリいつてさえくれたらおれたち殴るんじやあなかつたのに」弓の折れを指先で廻しながら、女勘助は眼を光らせた。

「いや、いづれその事については、白旗様からいい訳があるう。とにかくおれの見たところでは、銅銭会員じやあなさそうだ」神

道德次郎はいい切った。

「さて白旗弓之助様、昨夜はどういう覚し召しで、ここへお忍びなされましたな？」

「それよりおれには聞きたいことがある。部屋の四隅の柱から、四本の鎖が飛び出して来たが、あれはなんという兵法だな？」これが弓之助の言葉であつた。

六人の者は眼を見合わせた。

「おい兄貴迂散うさんだぜ」女勘助が怒るようにいつた。「肝腎のいい訳をしねえじゃあねえか」

「待て待て」と徳次郎は叱るように。

「宝山流の振り杖から、私が考案致しました。捕り方の一手でござ

ございますよ」

「あれにはおれも降参したよ」弓之助は妙な苦笑いをした。「人間が斬ってかかったのなら、大して引けも取らないが、どうもね、鎖じゃあ相手にならねえ。……そこでもう一つ訊くことがある。紙に書かれた『川大丁首』いったいこいつはどういう意味だ？」

「それがおわかりになりませんか？」徳次郎は、いくらか探るように訊いた。

銅銭会縁起録内容

「随分考えたが解らなかつた」弓之助はまたも苦笑をし、「そこ
 においでの方勘助殿に、痛しめられている間中、その事ばかりを
 考えていたが、無学のおれには解らなかつたよ」女勘助をジロリ
 と見た。

女勘助は横を向き、プツと口をとがらせた。

「それで初めてあなた様が、銅銭会員でないことが、ハッキリ証
 拠立てられました」徳次郎は一つ頷いたが、

「あれは隠語でございます。銅銭会の隠語なので。「順天行道」
 と申しますそうで。天に順したがつて道を行なう。こういう意味だそう
 でございます。つまり彼らの標語なので。「関かんをひらきみちをあらわす開路現」
 こんな標語もございます。そうしてこれを隠語で記せば「並へいせい井

そくぎよく
足玉」となりますそうぞうで」

「ははあなるほど、そうであつたか。扁を取つたり旁つくりを取つたり、色々にして造つた字だな。いかさまこれでは解らないはずだ」

「さてそこで白旗様、どうして昨夜はこの屋敷へ、忍び込まれたのでございますかな？」

するとクルリと弓之助は、女勘助の方へ体を向けた。

「おい勘助、偉いことをやつたな。森の中でよ、社の森で」

「えつ」と勘助は胸を反そらせた。「へえ、お前さんご存知で？」

「あんまり見事な業わざだったので、後からこつそり尾行つげて来た奴さ」

「あつ、さようぞうございましたか」女勘助は手を拍つた。「そこでこの屋敷へ忍び込んだので？」

「そうさ天明の六人男、そいつがみんな揃ったとあつては、ちよつと様子も見たいからな」「ああこれで胸に落ちた」こう紫紐丹左衛門がいった。

北町奉行所の役宅であつた。

その一室に坐っているのは、奉行曲淵甲斐守であつた。銅銭会縁起録が開かれたまま、膝の上に乗っていた。

「往おうせき昔福建省福州府、浦田ほだ県九連山山中に、少林寺と称する大寺あり。堂塔伽藍がらん樹間に聳え、人をして崇敬せしむるものあり。達尊たつそん爺や々の創建せるも技一千数百年の星霜を經。僧侶数百の武に長じ、軍略劍法方術に達す。

康帝こうきの治世に西蔵チベット叛す。官軍ごとく撃退さる。由よつて皇帝諸国に令し、賊滅するものを求めしむ。少林寺の豪僧百二十人、招に応じて難おもむに赴く。国境に至りて大いに戦い、敵国をして降を乞わしむ。皇帝喜び賞を与え僧を少林寺に帰さんとす。隆り文うもん耀よう、張ちやう近きん秋しゆう、二人の大官皇帝に讒ざんし、少林寺の僧を殺さしむ。

兵を発して少林寺を焼く、蔡さい徳とく忠ちゆう、方ほう大たい洪こう、馬ば超ちゆう興こう、胡こ徳とく帝てい、李り式しき開かいの五人の僧、兵へい燹せんをのがれて諸国を流浪し同志を語らい復讐に努む。すなわち清朝を仆さんとするなり。この結社を三合会また一名銅銭会と称す」

これがきわめて簡単な、銅銭会の縁起であつて、今日に至るま

での紆余曲折が詳しく書物ほんには記されてあつた。

「公所（大結社）」のことや「会員」のことや「入会式」のことや「誓詞」のことや「諸律法」のことや「十禁」の事や「十刑」の事や「会員証」のことや「造字つくりじ」のことや「隱語」のことや「符牒」のことや「事業」の事や「海外における活動」のことについて、かなり詳しく記されてあつた。

しかし、將軍家紛失に關しての、暗示らしいものは記されてなかつた。

とまれ非常な大結社で、支那の政治にも戦争にも、また外交の方面にも、偉大な潜勢力を持つてゐることが、記録によつて窺うかがわれた。のみならず印度インドや南洋にある、百万近くの支那人のうち、

過半以上は会員として、働いていることも記されてあつた。

それと同時に会員のうちには、不良分子も潜在していて、悪いことをしているということも、支那人以外にも会員があつて、氣脈を通じているということも、相当詳しく記されてあつた。

京師殿と甲斐守

「恐らく今度の事件なるものは、日本における会員の、不良分子の所業しわざであろうが、どういう径路で將軍家をどうして奪つたかわからない。どこに將軍家を隠しているか、それとも無慚しんに弑しいした

か、これでは一向見当が付かない。……一人でもよいから銅銭会員をどうともして至急捕えたいものだ」

甲斐守は沈吟した。

その時近習がはいって来た。

「京師殿と仰せられるご老人が、お目にかかりたいと申しまして……」

「何、京師殿、それはそれは。叮嚀ていねいにここへお通し申せ」

近習と引き違いにはいつて来たのは、両国橋にいた老人であった。

「おおこれは京師殿」

「甲斐守殿、いつもご健勝で」

二人は叮嚀に会釈した。

「さて」と京師殿は話し出した。「銅銭会の会員ども、今夜騒動を始めますぞ」

「何？」と甲斐守は膝を進めた。「銅銭会の会員がな？　してどこで？　どんな騒動を？」

「今夜五更花川戸に集まり、ある家を襲うということでごさる。同勢おおかた三百人」

両国橋での出来事を、かいつまんで京師殿は物語った。

「銅銭会員にご用ごさらば、即刻大至急にご手配なされ、一網打尽になさるがよかろう」

「よい事をお聞かせくだされた。至急手配を致しましょう」

「何か柳営に大事件が、勃発したようでございますな」

「さよう、非常な大事件でござる。実は一昨夜上様が……」

「いやいや」と京師殿は手を振った。

「愚老は浮世を捨てた身分、直接柳営に関することは、どうぞお聞かせくださらぬよう」

「いかさまこれはごもつともでござる」

そこで甲斐守は沈黙した。

間もなく京師殿は飄然と去った。

さてその夜のことであった。

花川戸一帯を修羅場とし、奇怪な捕り物が行われた。

歴史の表には記されていないが、柳営秘録には相当詳しく記され

てあるに相違ない、この捕り物があつたがため幕府の政治が一変し、奢侈しゃしげ下剋上こくじょうの風習が、勤儉質素尚武となり、幕府瓦壞の運命を、その後も長く持ちこたえたのであつた。

この捕り物での特徴は、捕られる方でも、捕る方でも、一言も言葉を掛け合わなかつたことで、八百人あまりの大人数が、長い間格闘をしながらも、花川戸一帯の人達は、ほとんど知らずにおわつてしまった。しかも内容の重大な点では、慶安年間由井正雪が、一味と計つて徳川の社しゃ稷しよくに、大鉄槌を下そうとした、それにも増したものであつた。捕り方の人数六百人！この一事だけでも捕り物の、いかに大袈裟なものであり、いかに大事件であつたかが、想像されるではあるまいか。一口にいえば銅銭会員と

幕府の捕り方との格闘なのであった。

その夜はどんよりと曇っていた。月もなければ星もなかった。家々では悉く戸を閉ざし、大江戸一円静まり返り燈火ともしび一つ見えなかった。

と、闇から生まれたように、浅草花川戸のひとところ一所に、十人の人影が現われた。一人の人間を真ん中に包み丸く塊かたまって進んで来た。一軒の屋敷の前まで来た。黒板塀がかかっていた。門がピツタリ閉ざされていた。屋根の上に灰ほのぼの々々と、綿のようなものが集まっていたがどうやら八重桜の花らしい。

その前で彼らは立ち止まった。

とまた十人の一団が一人の人間を真ん中に包み、闇の中から産

まれ出た。それが屋敷へ近付いて来た。先に現われた一団と後から現われた一団とは、屋敷の門前で一緒になった。互いに何か囁き合つた。わけのわからない言葉であつた。

慶安以来の大捕り物

「背うしろに幾多いくたの宝玉ありや？」

「二百八」

「途上虎あり、いかにして来たれる？」

「我すでに地神に請えり、全国通過を許されたり」

「汝橋を過ぎたるや否や？」

「我過ぎたり矣」

「いずれの橋ぞ？」

「二板はんの橋」

「これすなわち二板橋、何ゆえに二板の橋というや？」

「明みんまつ末しんに清こぼこれを毀ち、なおいまだ修せられず」

「何んの木の橋ぞ？」

「否々これ樹板にあらず、左は黄銅、右は鉄板」

「誰かこれを造れるものぞ？」

「朱開、及び朱光の徒」

「二板橋の起原いかん如何？」

「少林寺ふんしょう 焚しょう 焼しょう され、五祖叛迷者に 傷しょうがい 害がい されんとするや、
 達尊たつそん 爺や々 験げん を現わし、黄雲を變じて黄銅となし黒雲を變じて鉄と
 なす」

こんな塩梅あんばい の言葉であつた。はたして会員か会員でないかを、
 問答によつて確かめたのであつた。またも人影が産まれ出た。同
 じような陣形であつた。門前で問答が行われた。続々人影が現わ
 れた。みんな門前へ集まつて来た。そのつど問答が行われた。

銅銭会員三百人が、すっかり門前へ集まつたのであつた。

と、五、六人の人影が、スルスルと塀の上へ上つて行つた。音
 もなく門内へ飛び下りた。門を開けようとするのであろう。だが
 門は開かなかつた。そうして物音もしなかつた。人は歸つて来な

かった。何んの音沙汰もしなかった。

いつまでも寂然と静かであつた。

十人の人影が塀を上つた。それから向こうへ飛び下りた。何んの物音も聞こえなかった。そうして門は開かなかつた。十人の者は帰つて来なかつた。何んの音沙汰もしなかった。いつまでも寂然と静かであつた。

銅銭会員は動揺し出した。口を寄せ合つて囁いた。

「敵に用意があるらしい」不安そうに一人がいった。

「殺されたのか？ 生擒いけどられたのか？」

「どうして声を立てないのだろうか？」

彼らの団結は崩れかかつた。右往左往に歩き出した。

「門を破れ。押し込んで行け」

「いや今夜は引つ返したがいい」

彼らの囁やきは葉擦れのようにであった。

「あつ！」と一人が絶叫した。「あの人数は？ 包囲された！」

まさしくそれに相違なかった。往来の前後に黒々と、数百の人数が屯^{たむ}ろしていた。隅田川には人を乗せた、無数の小舟が浮かんでいた。露路という露路、小路という小路、ビツシリ人で一杯であった。捕り方の人数に相違なかった。騎馬の者、徒歩^{かち}の者、：

…八州の捕り方が向かったのであった。

銅銭会員は一団となった。やがて十人ずつ分解された。そうして前後の捕り方に向かった。

こうして格闘が行われた。

全く無言の格闘であつた。だがどういふ理由からであろう？

官の方からいふ時は、御用提燈ごようちようちんを振り翳かざしたり、御用の声を響かせたりして、市民の眼を覚ますことを、極端に恐れ遠慮したからであつた。捕り物の真相が伝わつたなら、——すなわち將軍家紛失の、その真相が伝わつたなら、どんな騒動が起こるかも知れない。それを非常に案じたからであつた。

だがどうして銅銭会員は悲鳴呶号しなかつたのであろう？ それは彼らの「十禁」のうちに、こういうことがあるからであつた。「究極において悲鳴すべからず。これに叛そむくものは九指を折らる」九指とは九族の謂いひであつた。

春の闇夜を数時間に渡つて、無言の格闘が行われた。

その結果は意外であつた。銅銭会員は全部死んだ。すなわちあ
る者は舌を噛み、またある者は水に投じ、さらにある者は斬り死
にをした。

将軍家柳営へ帰る

この間も屋敷の表門は、鎖とぎされたまま開かなかつた。

捕り物がすっかり片付いた時、始めて門はひらかれた。

驚くべき光景がそこにあつた。銅銭会員十六人が、髪繩けなわで絞首

されていた。髪繩の一端には分銅があり、他の一端は門の柱の、
剝り穴えぐの中に没していた。

十六人のうち三人が、辛うじて蘇生をすることが出来た。その
三人の白状によつて、事件の真相が明瞭になった。

その夜の暁千代田城内には、驚くべき愉快な出来事があつた。
いつもの將軍家の寢室に、紛失したはずの將軍家が、ひどく健じょう
康ぶそうな顔色をして、グツスリ寝込んでいたものである。

眼を覚ますと家治はいつた。

「おれはうんと書物ほんを読んだよ。實際浮世にはいい書物ほんがあるな
あ。はじめておれは眼が覚めたよ。さてこれからは改革だ。政治
の改革、社会の改革、暮しいい浮世にしなければならぬ」

「しかし上様には今日まで、どこにおいででございましたな？」
老中水野忠友が聞いた。

「うん、越中の屋敷にいたよ」

「ははあ松平越中守様の？」

「うん、そうだよ、越中の屋敷に」

「どうしてどこからお出いでになりました？」

「それがな、本当に変へんてこ艇ていだったよ。おれが後苑を歩いていると、素的な別嬪が手招きしたものだ。でおれは従ついて行つた。すると大奥と天主台の間に嚴封をした井戸があろう。非常な場合に開くようにと、東照神君から遺言された井戸だ。そこまで行くとその別嬪が、蓋を取つてヒョイとはいつた。オヤとおれは驚いて、井

戸を覗くと繩梯子がある。井戸ではなくて間道だったのさ。こいつ面白いと思つたので梯子を伝わつて下りたものさ。すると底に女がいた。それから五人の男がいた。六部と破落戸ごろつきと売卜者ばいぼくしゃと、武士さむらいと坊主とがいたつてわけだ。すぐにおれは取つ掴まつてしまった。でおれは仰天して助けに来てくれーツと叫んだものさ。だがすぐ猿轡さるくつわを箠はめられてしまった。そうしてとうとう引つ担がれてしまった。長い間横穴を走つたつけ。それでもとうとう外へ出たよ。駕籠が一挺置いてあつた。いやどうもそれが穢きたない駕籠でな、おれは産まれて初めて乗つたよ。下ろされた処ところに屋敷があつた。黒板塀に門があつて、八重桜の花が咲いていたつけ。そこで休憩したものさ。一杯お茶を貰つたが、ひどく咽喉が乾いていた

ので、途方途徹もなくうまかった。そこでまた駕籠へ乗せられたものさ。今度は立派な駕籠だった。大名の乗る駕籠だった。そうして武士どもが三十人も、駕籠のまわりを警護してくれた。でようやく安心したものさ。着いた所が越中の屋敷だ。あの真面目まじめの越中めが、いよいよ真面目の顔をして『上様ようこそ渡らせられました。いざいざ奥へお通り遊ばせ』こういった時にはおれは怒った。

『越中！ お前の指さしがね金だな！』すると越中めこういいおった。

『上様のお命をお助けしたく、お連れ致しましてございます』とな。そこでおれは怒鳴ってやった。『誰かこのおれを殺そうとするのか？』』

『はい上様の寵臣が、ある結社を味方とし、上様を狙っておりますので』

『それでお前が助けたというのか？』

『毒を制するに毒をもつてし、ある六人の悪漢を手なずけ、お連れ申しましてございます』——で、おれは黙ってしまった。そうして奥座敷へ通つて行つた。そこに彦太郎がいるじやあないか。三河風土記を読んでくれた、近習の中山彦太郎がな。おれはすっかり喜んでしまった。風土記の続きが聞きたかつたからさ。『おい彦太郎風土記を読め』おれは早速いったものさ。そこで彦太郎め読んでくれたよ』

れは越中の屋敷で、暮らしていたというものさ。その今朝越中がこんなことをいった。『結社は退治られてしまいました。もはや安全でございます。お城へお帰り遊ばしませ』そこでまたもや駕籠へ乗り、以前の道を帰って来たのさ……。さあ改革だ！ 建て直しだ。いい政事まつりごとをしなけりやならない」

だが不幸にも家治將軍は、その後間もなく逝せい去きよした。田沼主殿頭が薬師くすしをして、毒を盛らせたということであるが、真相は今にわからない。

しかし家治の遺志なるものは、幸い実行することが出来た。家治の死後電光石火に、幕府の改革が行われ、田沼主殿頭は失脚し、大封を削られて一万石の、小大名の身分に落とされてしまった。

代わって出たのが松平越中守で、老中筆頭の位置に坐り、寛政の治を行うことになった。

青葉の季節が訪ずれて来た。

半太夫茶屋の四畳半で、愉快的な媾あいびき曳びきが行われていた。

弓之助とお色との媾あいびき曳びきであつた。

「おいお色、おい女丈夫、お前は命の恩人だぜ」

「そう思ったら邪魔にせずに、精せいせい々いこれから可愛がるといいわ」

「あの時お前が来なかるうものなら、女勘助っていう奴に、おれはそれこそ殺されたかもしれねえ」

「ご身分なのを宣ればよござんしたに」

「莫迦め、そんなことは出来るものか、がんじ擲がらみにされたんだからなあ。おめおめ生け捕りにされた身で、名前や素姓が明されるものか」

「ほんとにそれはそうですわねえ」お色は胸に落ちたらしい。金魚売りの声が表を通った。燕のさえずりが空で聞こえた。

「六人の奴らどうしたかな？」

ふと弓之助は壊しそうにいった。「江戸にはいないということだが」

「泥棒なんて厭ですわねえ」お色は眉間へ皺を寄せた。

「それもご治世が悪かったからさ。人間いよいよ食えなくなると、どんな事でもやるものだからな」

ちよつと弓之助は感慨に耽つた。

「ご治世は変わったじやありませんか。越中守様がお乗り出しになり」

「有難いことには変わったね。これから暮らしよくなるだろう。ところでどうだいお前の心は」

「何がさ？」

とお色は怪訝けげんそうに訊いた。

「変わったかよ？ 変わらないかよ？」

「そうねえ」

とお色は物憂そうにいった。「あなた、お役付きになつたんでしょう？」

「越中守様のお引き立てでね」

「権式張らなければいけないわねえ」

「へえ、そうかな、どうしてだい？」

「お役人様じゃありませんか」

「ほほうお役人というものは、権式張らなけりやあいけないのか
え」

「みんな威張るじゃありませんか」

「よし来た、それじゃあおれも威張ろう」

「では、わたし妾はさようならよ」

「おっと、おっと、どういう訳だ？」

「妾威張る人嫌いだからよ」

「俺が」と弓之助はゴロリと左寝の肘を後脳へ宛てた。「威張れるような人間なら、もっと早く役附いていたよ」

「どうしてでしょう？ 解らないわ」

「一方で威張る人間は、それ一方では諂うからさ」

「ああそうね、それはそうだわ」

「おれの何より有難いのは、生地きじで仕えられるということさ。越中守様の下でなら、お太鼓を叩く必要もなければ怒ってばかりいる必要もない。楽いに呼吸いきを吐けるといふものさ」

この意味はお色にはわからなかった。

「お色、久しぶりで何か弾けよ」

「ええ」といって三味線を取った。「あら厭だ糸が切れたわ」

「三の糸だろう、薄情の証拠だ」

「お気の毒さま、一の糸よ」

「それじゃあいよいよかかあ嬬になれる」

「ゾツとするわ！ 田沼の爺じじい！」

「何さ、田沼のその位置へ、俺が坐ろうというやつよ」

「まあ」といつて三味線を置いた。

「大して嬉しくもなさそうだな」

「だま瞞すと妾狂きちがい人になるわ！」

二人はそこで寄り添おうとした。有難い事には野暮天やぼてんではなかつた。

寄り添う代わりに坐り直した。と、お色がスツと立った。

裏の障子を引き開けた。眼の前に隅田が流れていた。行き交う船

！ 夕焼け水！

「ああ私にはあの水が……」湯のようだと言われ彼女はいおうとした。だがそういわなかった。「ああまるで火のようだわ」こう彼女はいったものである。

間もなく季節は真夏に入ろう。恋だって火のように燃えるだろう。だがその次には秋が来よう。結構ではないか実を結ぶ季節だ。

京師殿とは何者であろう？ 結局疑問の人物であった。あの有名な天一坊事件、その張本の山内伊賀介、その後身ではあるまいか？ 非常な学者だということから、特に助命して大岡家に預け、幕府執政の機関とし、捨扶持すてぶちをくれていたのかもしれない。

伊賀介の元の主人といえ、京師の公卿の九条殿であつた。

青空文庫情報

底本：「銅銭会事変 短編」国枝史郎伝奇文庫27、講談社

1976（昭和51）年10月28日第1刷発行

初出：「週刊朝日 春季特別号」

1926（大正15）年4月1日

※底本は、物を数える際や地名などに用いる「ヶ」（区点番号5-86）を、大振りにつくっています。

入力：阿和泉拓

校正：湯地光弘

2005年2月21日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

銅銭会事変

国枝史郎

2020年 7月13日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しむ青空ヘルパー <http://aohelp.club/>

※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。

<http://tokimi.sylphid.jp/>